

<研究名称>

舌癌発症 10 年経過後に嚥下障害が重度となった一症例 —バルーン拡張法の有効性—

<実施責任者>

リハビリテーション 言語聴覚士 中澤 肇

<研究期間>

倫理審査委員会承認後から 2 年間

<研究の目的・意義>

バルーン拡張法は、食道入口部開大不全がある嚥下障害者に対して実施される手技であるが、一般的にはワレンベルグによる食道入口部通過障害に対して多用されている。しかしながら、バルーン拡張法は他の疾患に対しても有効とする報告が散見され始めており、食後に嚥下障害が重度となりバルーン拡張法を含む嚥下機能訓練により、3 食経口摂取が可能となった一症例の回復経過を検討することで、バルーン拡張法の有効性が輪状咽頭筋弛緩不全に効果があり、廃用に起因する食道入口部開大不全の訓練にはバルーン拡張法を併用することが望まれ、臨床的に意義深い結果が導ける。経過と結果をまとめ日本言語聴覚士学会に発表する。

<実施内容（方法）等>

嚥下造影検査とバルーン拡張法を実施し、嚥下造影検査の静止画から舌骨移動距離と食道入口部径を計測し効果を検証する。1 回目の嚥下造影検査から 3 回目の嚥下造影検査時の食事頻度、食事時間、DSS、藤島 Gr、発話明瞭度、むせの頻度で経時的に評価する。

<実施責任者及び実施担当者>

実施責任者 リハビリテーション 技師長 木村 和久

実施担当者 リハビリテーション 言語聴覚士 中澤 肇

<問い合わせ先>

当研究に自分の試料・情報利用を停止する場合等のお問い合わせ
〒070-8530

旭川市曙 1 条 1 丁目 1 番 1 号

旭川赤十字病院 リハビリテーション 中澤 肇

TEL 0166-22-8111 FAX 0166-24-4648